

國學院大學學術情報リポジトリ

上代文学の伝承と表現

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 烏谷, 知子, Karasudani, Tomoko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002416

『上代文学の伝承と表現』要約

鳥谷 知子

本論文の構成は以下の通りである。

序章 上代文学の基層と表現

第一部 古事記神話の表現

第一章 葬送儀礼と神話

第一節 黄泉国訪問神話の構成

第二節 喪山

第二章 天照大御神と須佐之男命

第一節 須佐之男命―そのさすらいをめぐつて―

第二節 天照大御神と高御産巢日神―常世から高天原へ―

第三章 古事記上巻から中巻へ―神話と人の世をつなぐ表現―

第一節 古事記上巻の玉について

―誓約・天の石屋戸神話、海宮訪問神話を中心に―

第二節 木花之佐久夜毘売神話と比婆須比売伝承

―「美」の選択と「甚凶醜」の拒否の伝承展開と古事記の構想―

第三節 古事記の言―「言向」「言挙」への展開―

第四章 崇神記・垂仁記の祭政

第一節 祭祀から見た崇神天皇像

第二節 沙本毘売伝承における心理表現と文学性

第三節 古事記中巻における出雲世界
―本牟智和氣命伝承と倭建命伝承を中心に―

第五章 倭建命伝承

第一節 倭建命承の文学性

第二節 大御葬歌の考察

第六章 仲哀記と心神記の伝承

第一節 息長帯比売命と品陀和氣命の伝承―「喪船」と「易名」を中心に―

第二節 「春山之霞壯夫と秋山之下氷壯夫」の物語の意義

第七章 仁徳記の伝承

第一節 石之日売命の太后像

第二節 仁徳記における「枯野の船」・琴の伝承の意義

第八章 允恭記と雄略記の歌謡と伝承

第一節 軽太子と軽太郎女伝承

第二節 『古事記』雄略天皇条の構成―若日下部王と赤猪子の伝承を起点として―

第二部 説話と歌謡

第一章 神婚説話の変容

第一節 箸墓伝承の成立

第二節 『日本霊異記』中巻第三三縁考

第二章 歌謡と抒情の表出

第一節 古代道行詞章―影媛歌謡を中心に―

第二節 春日皇女の唱和歌謡についての一考察

第三部 天武・持統朝の思想と表現

第一章 万葉集に表れる信仰

第一節 穴師の神―風神の信仰―

第二節 持統天皇の天武天皇挽歌―第一六〇・一六一番歌の背景―

第三節 持統天皇の斎会歌考

第二章 宮ぼめの表現

第一節 大殿祭祀詞の成立の背景について

第二節 万葉殯宮歌考―宮遷りの表現を中心に―

本論文は、『古事記』神話・説話の作品論を中心に、古代歌謡を通じた古事記の文学性、『万葉集』所載歌の考察を通して『古事記』が編まれた時代の信仰・思潮を論じた。

古事記の神話伝承を理解するには、古代人がもっていた精神文化や思想、舶来文化が渦巻く当時の日本の情勢を把握する必要があると思う。本論文の意義は、古事記の神話や説話の分析に、大嘗祭・殯宮儀礼・服属儀礼などの祭祀・儀礼や、皇位継承や姫彦制などの歴史の視点を取り入れ、古事記の文学性について考察した点にある。なお、第一部、第二部、第三部は、互いにリンクする内容をもつ。

中心になるのは古事記の世界観、天皇と祭儀の二点である。いくつかの章や節が交互に関わり合うのだが、一つ目は、天照大御神について考察した第一部第二章第二節「天照大御神と高御産巢日神―常世から高天原へ―」、及び第三章第三節「古事記の言―「言向」「言挙」への展開―」、第三部第一章第三節「持統天皇の斎会歌考」、第二節「持統天皇の天武天皇挽歌―第一六〇・一六一番歌の背景―」である。太陽神の原郷である海の彼方にあつた伊勢と関わる常世国が、水平的世界観から、高天原―葦原中国という垂直的世界観へと展開するのが「日の皇子」思想が形成されていく天武から持統にかけての時代である。それは天武・持統二代の「天渟中原瀛真人天皇」と「高天原広野姫天皇」の和風諡号に、「原」という大和王権の祭政空間が「瀛」から「高天原」へ昇華していく過程が象徴的に表れ、そこには道教思想が少なからず介在する。天皇家の垂直的神話世界の確立と共に、古事記神話において須佐之男命・高御産巢日神とペアで描かれ、太陽神だけでは収まらない様々な性格を合わせもつ天照は、天の石屋戸神話を通して日る女から高天原の皇祖神へと昇格し、「言依せ」「命以て」という言による決定権を有する神に成長し、葦原中国を「言向け和平す」平定を主導して天の下の世界を秩序立てて行く。こうした天皇家の世界観の確立と関わるのが倭建伝承である。二つ目は第一部第五章第一節「倭建伝承における文学性」、第二節「大御葬歌の考察」である。伊勢の天照大御神信仰を奉じ、景行天皇に成り代わって西征・東征を成し遂げる倭建は「高光る 日の御子 やすみしし わが大君」（二八）と称えられ、穀霊の体現者として描かれる。常世の国から飛来する白鳥は豊饒をもたらす穀霊の化身と考えられており、命が化した八尋白智鳥の飛翔の起点が「なづき田」と語られるのも、こうした古代観想が反映している。第三四番歌謡「なづきの田の 稲幹に 稲幹に 匍ひ廻ろふ 野老蔓」の「なづ」を語幹にもつ語は、記紀集中の用例の約半数が水に係して用いられる。「なづき田」が水に浸った田であるならば、この歌謡に詠まれた水・田・稲・匍ひ廻るふの表現には、大嘗祭に関わる最も原初的な意味が見られる。大嘗祭は稲魂と融触した形で説かれる天皇の死と再生が演じられる稲の祭儀である。第一部第一章第二節「喪山」で述べたように、天若日子の喪屋の伝承は日本書紀第

九段では、殯がなされたのは新嘗の時であったと記される。死と再生が語られる伝承には新嘗祭の観想がつきまとう。新嘗は神人の再生を期し、殯も元は復活を期する祭儀であった。新嘗と殯に共通する祭儀の性格があったとすれば、この歌謡も大御葬歌であると伝承されながら、一首目には復活を期する大嘗祭の面影を見ることが出来ると思われる。三首の歌謡は「なづ」を語幹にもつ語でつながっている。四首に詠み込まれた「なづきの田」「浅小竹原」「海」「浜つ千鳥」は農業信仰によって結びついており、それぞれが穀霊の死と再生の儀式に関わる場である。「磯」はこの世とあの世の境界であり、穀霊の来臨を迎え、また見送る場所でもあった。それゆえ、八尋白智鳥の道行きを語る四首は大御葬歌になり得たと思われる。水平的な神話世界と垂直的な世界観が交錯する様は、この葬送場面にも表れている。歌謡において舞台としての海を描き、地の文で悲劇的な最期を遂げた倭建の霊は「天」高天原を指向している。倭建の版図拡大の道行きは、第一部第二章第一節「須佐之男命―そのさすらひをめぐって―」に記したように、日向―高天原―出雲―根の堅州国という垂直の世界を移動し、さらに子孫の大国主神の大八島国の国作りの活動領域とも関わっている。天の恵みを受けて太陽や風雨の祭祀上の統治によって、農耕の繁栄をもたらす祭政王としての天皇像を描くのが、古事記の王権の神話伝承の構想であったと思われる。

次に本論文で取り上げたテーマを概説する。

第一部第一章では、葬送儀礼の神話を論じた。第一節の黄泉国訪問神話において、陰陽の結合によって三貴子の誕生や神々の生成を説く書紀本文には黄泉行きは語られない。それに対して古事記は伊耶那美命が神避るといふ移動表現を用いる。比婆の山に埋葬されたはずの伊耶那美が黄泉国の殿戸の中に横たわるといふ不思議な状況が一つ火によって現出される。黄泉比良坂で伊耶那岐命と伊耶那美命が葦原中国の生を司る神と死を司る黄泉大神とに展開するのは、神話形成に陰陽五行思想や道教思想が取り入れられ、二神に北斗七星が有する人の生と死を司る力が、それぞれに分離して受け継がれるように構成されたためと考えられる。第二節では天若日子神話を論じた。書紀第九段本文には、天稚彦が「新嘗して休臥せる時」に射殺されたことある。また弔問に訪れた味耜高彥根神が穢き死人に間違われたのを怒り喪屋を切り倒して成ったのが喪山とある。死と再生を図る殯と新嘗は、生死を一連のものと捉える上代では表裏一体の関係にあることから、記紀の天若日子神話は殯宮儀礼と葬送、及び新嘗祭と即位式が分化していく過程を反映したものであると考察した。

第二章では、天照大御神と須佐之男命について論じた。須佐之男は高天原と葦原中国、根之堅州国を往還・還流し、二つの世界の空間的位置関係と版図を確定する。上代文献におけるスサ・ススを含む語は、そのものが有する本質を著しく発現する盛んな状態をさし、須佐・須須(珠洲)の地名や須佐之男のさすらう性格にもこの意が投影されている。須佐之男は高天原と葦原中国、根之堅州国を往還・還流することによって、二つの世界の空間的位置関係と版図を確定する。風神・雷神・穀物神としての伝承基盤をもち、天照と対立・融合することによって神話を展開していくのが須佐之男命である。須佐之男命は天照との誓約によって皇統を継ぐ天忍穗耳命を儲ける。また、八俣大蛇の尾から出現した草那芸劔は、倭建伝承において東征の際に天照大御神信仰を奉じる思想的な拠り所となり、主人公の命運を左右する。神産巢日神に助けられて二度にわたる死を経て再生し、須佐之男命に

承認された大穴牟遲神は、出雲大神として天皇家の祭政に影響を及ぼす。須佐之男の爆発的な進む力は、景行朝に草那芸劔を携えて東征を果たす倭建命の大八島国平定という古事記の構想に關与している。一方天照大御神は須佐之男命との誓約によって皇統を継ぐ天忍穗耳命を儲ける。天の石屋戸神話は死と再生を経て天照大御神が最高神・皇祖神の資格を獲得していくことを説く。この段では思金神が天照を引き出す方策を思考するが、国譲りの段ではその父で冒頭に身を隠した高御産巢日神が再び登場する。国譲り神話では天照は司令神となり、高御産巢日神とペアになる。成長する天照の転換点となる石屋戸神話には「天の原」の語が一箇所記される。これは天照と高御産巢日神の常世の神としての原性格を表す語だと思われる。常世が高天原に昇格していく過程には、高御産巢日神の亦の名高木神の神名に見られる扶桑樹の信仰や北方型垂直他界観が介在している。また天照は空間を支配し、「詔り別け」「言依す」など言による決定権を有する神に成長し、「言向け和平す」は天照の意志を負う行為として表現される。

第三章では、木花之佐久夜毘売神話を論じた。この神話には送り返される石長比売に「甚凶醜」の形容がされる。醜の拒否と美の選択の要素は垂仁記の円野比売伝承にもある。美しい女性は皇統を保持し、「甚凶醜」の女性はその後の物語を展開させ、古事記の世界を海という他界に広げて行く働きをもつことを述べた。続く海幸山幸神話では、海と山の支配権をめぐる兄弟が対立するが、海神の助力を得た火遠理命・山幸彦が勝利する。二つの異なる性質のものが対立と融合を繰り返しながら秩序が形成され、神話が展開していくところに古事記の特徴がある。

第四章では祭祀伝承から崇神天皇を論じた。上巻の大物主神の祭祀は初代神倭伊波礼毘古命が、神の御子伊須氣余理比売を皇后と定め引き継ぐ。三輪山伝承では大物主神と活玉依毘売の神婚を孝安天皇の御代と想定させ、四世の孫意富多多泥古を神主とすることによって神代から引き継がれた崇神朝の祭政の完成を語る。第四章第二節では古事記の文学性に触れた。「垂仁記」の沙本毘古沙本毘売の伝承は、同母妹の沙本毘売が垂仁天皇の后になれば自らが皇位に就けるかも知れないという佐保の地を治める首長沙本毘古の野望と、同母の兄と垂仁天皇との間で、姫彦制と天皇制、母系と父系のダブルバインド状態に追い込まれた沙本毘売は愛に引き裂かれる女性である。沙本毘売の葛藤は天皇への謀反の告白を契機に毅然とした態度に変貌する。沙本毘売の夫帝への想いは漢籍の例を踏まえた喪失の悲しみを表す「哀情」である。天皇の后への想いは「愛」であり、愛する后さえ救えない天皇の苦悩が描かれる。沙本毘売は垂仁天皇との間の御子を助け、毅然とした態度で旧体制を自らと共に葬り去り、公が成り立つように行動する。旧体制（ヒメヒコ制）をとる佐保国のヒメである沙本毘売が新体制（天皇制）である師木の垂仁天皇に御子を差し出し自らは滅ぶという叙述によって、王権の絶対性を描いたのが古事記の沙本毘売伝承である。この伝承は滅び行く側に身を置き、破滅に向かう結末を予測しながら懸命に生きる主人公の情理を歌謡を一首も用いずに描ききる、高度な散文の達成を果たしている。

第五章では、倭建伝承と大御葬歌を論じた。歌謡の第一首と第三首は「なづき」「なづむ」の語によって結びつく。倭建命の化した八尋白智鳥の飛翔の起点は「なづき田」と語られる。「なづ」を語幹にもつ語は、雑歌・相聞歌・挽歌に亘って表れ、「なづむ」「なづさふ」は水と関わりを有する。第三五番歌謡の「なづき田」の田と水、「稲幹」「匍ひ廻ろふ」の語が穀霊の死と再生が演じられる大嘗祭の祭式を連想させ、穀霊の体現者であ

る天皇の死と再生を説く農耕祭式の死の要素が大御葬歌に昇華していく要因だったと考えられる。三五〜三七番は「なづき」「なづむ」の語によって結びつき、三五〜三八番は「なづき田」「浅小竹原」「大河原」の川と「海」、「磯」の有する他界信仰とその背景にある穀霊の死と再生の儀式に関わる場が詠み込まれることによって結びつき、三八番の「浜つ千鳥」が「八尋白智鳥」と結び付き、穀霊の化した白智鳥が天皇家の原郷「天」・高天原を指向したと語ることによって大御葬歌として一括されたのだろう。

第六章では、古事記に「殯宮」が記される唯一の伝承を取り上げた。仲哀天皇の遺骸は「殯宮」に安置され国之大祓が行われる。神託は「坐汝命御腹之御子」「坐其神腹之御子」である男子が皇統を継ぐと下され、息長帯比売命は傍線部のように天照大御神と同様に皇統を保持する女性原理を体現する存在である。また殯宮儀礼を執り行う事によって、天皇霊の一时的な保有者となり、応神天皇の出生と即位に関わる。殯宮の記述は、「喪船」と関わるであろう。中巻の歴代天皇の条に入ると、天皇には個体の死はあっても、太陽神の子孫である日継の継承者、穀霊の体現者である天皇の魂は不滅であり、思想的には次の天皇は前天皇が復活したものと捉えられた。天皇の死と再生の思想が投影されたのが品陀和気命の「喪船」と「易名」の伝承である品陀和気命の喪船による登場は、天照大御神の石屋戸隠りにおける復活再生のモチーフと重ね合わせて描かれているだろう。また、「易名」によって気比大神から穀物神の性格を授けられ、伊奢沙和気大神と大帯日子淤斯呂和気命の「和気」を継承した新しい王者の誕生を語る。これらの伝承表現は、長い年月にわたって形成された思想伝承と、古事記の編纂に着手した天武・持統朝の万世一系の思想や死生観を反映して形成されたと考えられる。「易名」は成人した品陀和気命が食国の政を行う資格を獲得し、「和気」(ワケ)の名を名乗って帯(タラシ)系から分離独立し、天つ日継の継承者として承認される過程を描いていると考察した。

第七章では「足母阿賀迦邇」という馬の足掻きを表す石之日売の特異な嫉妬の表現に着目した。石之日売は八田若郎女の入内を知り、御綱柏を投棄し宮廷祭祀を放棄するが、出奔した後も豊楽の主催者として描かれる。石之日売は川を遡って大王に諭えられる聖なる木に近付き、遍歴を経て宮廷祭祀を放棄した罪を祓い、出奔した筒木での隠りを経て奴理能美に三種に変わる虫を献上される。また機織女の女鳥王の玉釧を奪った山部大楯連を死刑に処し、豊楽を主催する大后として再び宮廷に君臨する。石之日売の嫉妬が馬に諭えられるのは、馬嬢婚説話に代表されるように養蚕と馬は関わりを有し、聖帝仁徳天皇に並び立つ存在である養蚕の統括者としての大后像が形成されたためと考えられる。天皇と大后に反旗を翻す女鳥王も精彩を放つ。女鳥王は機織り女であり、大雀命の求婚を拒否し速総別王に謀反をそそのかす。愛の管理者とされた鳥の名を冠した登場人物の熾争いの終結が、豊楽の主催者石之日売によって図られる。聖帝に相応しい成長を遂げる大后像に特徴があると論じた。

第八章では軽太子と軽太郎女伝承の文学性について述べた。允恭天皇の子の世代の婚姻は内婚に向かう。同母兄妹の「姦」は起こるべくして起きた悲劇であるが、この世で結ばれることが許されない至高の存在として兄妹が描かれる。一〇首の歌謡中に「寝」を多用して懊悩と熱情の極まりを表現し、皇位継承争いの顛末が禁忌の侵犯、発覚、配流、心中によって語られる。軽太郎女は歌謡物語で衣通王の名を付され、泣く女から決然とした意志・行動力を備えた美貌のヒロインに生まれ変わり、「姦」は至上の愛に昇華される。伊

予での再会の際に、泊瀬の山の葬送と川での祭祀を詠み込むことによって悲劇性が漸増的に高められる。死と愛の普遍性が隠り国の泊瀬のイメージに重ねられ、兄妹相姦の禁忌は至上の愛の完結のように語られる。皇位継承者の姦という危機的な状況を、内部で克服し、浄化していく王権の普遍的正当性を描いたものである。第二節では若日下部王を取り上げた。雄略記は若日下部王への求婚譚に始まり、皇后が登場する新嘗祭の豊樂で締めくくられる。仁徳皇女である王は赤猪子から「日下江の 入江の蓮 花蓮 身の盛り人」と称えられる。「花蓮」は『遊仙窟』では恋する美しい女性の形容とされ、皇極紀三年六月の条では、蓮花の変異が蘇我氏の繁栄の祥瑞に付会される。朝日を浴びて花開く蓮は、日下の太陽信仰を名に負う若日下部王の比喩にふさわしい。赤猪子伝承では、雄略天皇と同様に王も時の支配を受けないかのである。王は時間の流れを超越した「身のさかり人」として赤猪子と対照的に描かれる。王は新嘗祭の豊樂で天皇を「葉広五百箇真椿」に喩え、「高光る 日の御子」と称揚する。高天原と大八州国の権威を併せ持つ時空を超越した祭政王・大長谷若建命に相応しい大后が描かれている。

第二部第一章では箸墓伝承を考察した。「箸」は神婚説話において本来は男性神のシンボルとみなされ、斎串・依代であった。箸墓伝承は、神婚説話と古墳造営起源説話が結びついたために、神と巫女を結ぶ「箸」がこの世と異郷を繋ぐ「端」「橋」「梯」の意に置き換えられ、百襲姫は箸に占められた死により、人の側から神の世界に生まれ変わったとした。

第二章では日本書紀歌謡の文学性について述べた。第九四番歌謡では葬送の道行表現に鮪の妻問いと影媛の視点を重ね、鮪の死が歌垣の神送りと重ねて表現され、権力闘争に翻弄された影媛の悲哀を表出する。第九七番の春日皇女の歌謡は、勾大兄と皇女の聖婚に『遊仙窟』の一夜の別れの切なさを重ねる。両歌謡は人間の愛と苦悩の遍歴や喪失の悲哀を語る。

第三部第一章では天武天皇挽歌を取り上げた。万葉集卷二の一六二番歌に詠まれた「日の御子」思想には、外界が海の彼方の常世から天に昇華していく過渡的な様子がうかがえる。一六〇・一六一番歌では、天武天皇の諡号「天淳中原瀛真人天皇」にみられる道教思想をふまえて論じた。一六〇・一六一番歌には道教思想が表れており、一六〇番の「火」「福路」「雲」の語には、一六一番の「向南山」で死後神仙として再生するために修行する天帝を案じる持統天皇の心情が述べられ、一六一番では天仙の資格を得た天帝が「青雲」に乗って星や月を離れて天の彼方の世界に飛翔した様が比喩的に語られる。一六〇番歌の「面智男雲」は難訓で、訓みも意味も定まらないが、天帝の面影と雲が関わると思われる。「燃ゆる火」「福路」の語も不明だが、『无上秘抄』巻五〇の火復爐法の項には、仙葉を調合する火を操ることによって福を受けることを「受福」とする。道教では火が重視され、「福路」は火と関わる天武天皇がおられる場所を暗示している。一六〇番歌は神仙となる修行の厳しさを思いやり、夫の分身の雲に、天帝の様子を問いかけるかのような心情が表出されている。一六一番歌の「向南山」は訓みもいずれの山をさすかも定まらぬが、道教では「南山」は重要な山であり、死者の魂は南宮での鍛錬を経て仙人になるとされた。藤原京から見て南に位置する吉野山は、壬申の乱を勝ち抜いた政権の出発点である。「青雲」は志の高さを喩える語である。『无上秘抄』巻九九 昇太清品には、「青雲之車」を仙人の乗物としており、一六一番歌は、天武天皇の御魂が修行が実り天仙の資格を得て、

青雲に乗り天の彼方に飛翔されたことを示唆していると考察した。

第二章では柿本人麻呂の殯宮挽歌について述べた。挽歌には、皇子女の薨去が生前の居所から宮遷りをしたように語られる。殯宮と類似した構造をもつと考えられる大嘗宮と斎田の分化、生前の宮と殯宮の分離、殯宮と陵墓の観念の接近など、死生観の変容、殯宮の形骸化などは万葉集の殯宮挽歌が詠まれた一つの要因であろう。持統天皇は天皇の葬礼に初めて火葬を導入した。こうした葬制の変革や都城の採用と歴代遷宮の廃止を背景に、天皇家の思想的な拠り所が文学的な表現として残されたのだろう。

以上述べてきたように、記紀の編纂に関わる天武・持統朝において、即位儀礼、神々の祭祀、葬送儀礼などの宮廷儀礼が急速に整えられていった事は、古事記の神話・説話の成立に大きな影響を及ぼしていると考えられる。上代文学の伝承は日本独自の基層を有し、その伝承基盤を保持しつつ漢籍の需要を通して、五行思想・道教思想・儒教思想を取り込みながら、新たな表現の世界を模索し切り開きつつ、文学表現を獲得していったと言える。歴史書の性格を有しながら、愛と苦悩の遍歴を語る倭建伝承や軽太子・軽大郎女の悲恋物語に象徴されるように、本来ならば歴史のうねりの中のみ込まれていく悲劇や喪失の悲哀を通して、人間の懊悩や心奥を掘り起こして表現することは古事記のテーマの一つと言えよう。古事記の伝承表現は、長い年月にわたって形成された思想伝承と、古事記の編纂に着手した天武・持統朝に整えられていく祭政や万世一系の思想、天皇独自の死生観を反映して形成されたと考えられる。